

視覚障害者にも安心して使える紙幣への早急な改善を！
お札についての視覚障害者アンケートの結果について

「識別マークはあってもお札は区別できない」「二千円札が出回って、さらにお札の区別が難しくなった」との声は、視覚障害者の中では常識です。このような状況を改善しようとして私たちは、二千円札の出回りから1年を期に、別紙のアンケート調査に取り組みました。

その結果

- ① 視覚障害者のために工夫したはずの識別マークが役に立っていない下で、「種類別に財布などの決めた所に入れる60.4%」「大きさで比べる58.4%」「親しい人に見てもらおう37.6%」「織り方を変える30.7%」と、紙幣識別に苦労している。
- ② 「廃止してほしい70.3%」「お札の種類が増えて困る63.4%」に対して「便利だと思う1%」が示すように、二千円札は使いにくいという声が圧倒的である。
- ③ 「識別に時間がかかる61.4%」「金額をまちがう51.5%」「おつりなどが間違っていると思っても相手に言えない30.7%」「領収書など他の紙片と間違える27.7%」など紙幣使用にバリアがある。
- ④ 「1万円という千円札をわたされた」「売り上げとして受け取った中にお札と同じ大きさの白紙が2枚入っていた」視覚障害者同士の金銭の授受の際に「紙幣と勘違いして領収書を渡してしまった」「1万円札のつもりが千円札を渡してしまった」など識別できない紙幣に関わる失敗の事例が出されている。
- ⑤ 識別できない紙幣は弱視者よりも全盲者に大きなバリアとなっていることなどが明らかになっています。

お札を使わない暮らしがあるでしょうか。いつでも・どこでも・だれにも安心して使える紙幣は、基本的な社会環境・条件のはずです。国際障害者年20周年の節目の年に私たちは、次のことの実施により、バリアフリー社会に相応しい紙幣の1日も早い実現を、関係機関と国民のみなさんに強く訴えます。

- 1、紙幣を、視覚障害者にも容易に識別できるものに改善して下さい。
- 2、紙幣識別にさらなるバリアとなっている二千円札の流通を止めて下さい。

2001年12月5日
東京視力障害者の生活と権利を守る会（東視協）
会長 鈴木 彰